

## 史料紹介

# 『看聞日記』現代語訳（一六）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（二三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』二（明治書院、二〇〇四年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

- 現代語訳（一）～（三） 応永二三年（一四一六）分 『米沢史学』三〇号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二号（二〇一四～一五年）
- 現代語訳（四）～（六） 応永二四年（一四一七）分 『米沢史学』三一号・『紀要』五一号・『生活文化研究所報告』四三号（二〇一五～一六年）
- 現代語訳（七）～（九） 応永二五年（一四一八）分 『米沢史学』三二号・『紀要』五二号・『生活文化研究所報告』四四号（二〇一六～一七年）
- 現代語訳（一〇）～（一二） 応永二六年（一四一九）分 『米沢史学』三三号・『紀要』五三号・『生活文化研究所報告』四五号（二〇一七～一八年）
- 現代語訳（一三）～（一五） 応永二七年（一四二〇）分 『米沢史学』三四号・『紀要』五四号・『生活文化研究所報告』四六号（二〇一八～

一九年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二八年（一四二二）一月一日から四月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただし、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

## 【主要参考文献】

- 横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）
- 瀬田勝哉『五条天神と祇園社』（同『洛中洛外の群像』、平凡社、一九九四年、初出一九八六年）
- 位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）
- 小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）
- 村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三、二〇一四年）
- 照井貴史「『事文賽打』について」（『アジア文化史研究』六号、二〇〇六

年)

松岡心平編『看聞日記と中世文化』(森話社、二〇〇九年)

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」(『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年)

松蘭斎『中世禁裏女房の研究』(思文閣出版、二〇一八年)

(表紙直筆外題)「看聞日記 応永二十八年正月より極月に至る」

(伏見宮貞成数え年五十歳)

応永二十八年辛丑正月一日、雨が降った。「いまは木徳(※)の治政で、世の中が穏やかに治まっている時期である。全国が泰平の教化の下にもどり、大勢の人々が雨露のような恩徳を浴びている。とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。

いつものように年始めのお祝いをした。田向経良三位・庭田重有朝臣・田向長資朝臣・慶寿丸・阿古丸らがこのお祝いに参列した。宮家に仕える女性たち、東御方・廊御方・亡き兄の妻であった上臈・私の妻である二条・今参らも参列した。一献の酒宴が終わった。いつものように小川禅啓ら五・六人と対面した。長資朝臣は早退した。朝廷の宴会に出仕するためだそう。

聞くところによると、朝廷の宴会の執行責任者は正親町三条公雅大納言、次席の責任者は裏辻実秀中納言・徳大寺実盛中納言・武者小路隆光参議・中御門宣輔参議、柳原行光参議兼左大弁、弁官は広橋宣光、少納言は東坊城長政朝臣。警備責任者は左が四条隆盛朝臣・松木宗継朝臣・白川雅兼朝臣、右は山科教豊朝臣・楊梅兼英朝臣・田向長資朝臣・木造持康朝臣だという。宴会が遅れたので、翌朝「三文字ほど欠失している」。

上皇様のお薬に相伴する役は西園寺実永前右大臣で、四条隆直大納言・裏辻中納言・清閑寺家俊中納言・東坊城長遠参議・藤原参議・柳

原参議兼左大弁が同席したそう。お薬を配る役は殿上人の中山定親朝臣・教豊朝臣・四辻季保朝臣・長資朝臣・宗継朝臣・雅兼朝臣・宣光らだという。室町殿足利義持が朝廷と上皇御所へお参りしたそう。※木徳(もくとく)：古代中国の陰陽思想「五徳終始説」による木徳・火徳・土徳・金徳・水徳の一つ。それぞれの王朝の徳や変遷を説明するもの。

二日、晴。前日同様、年始のお祝いをした。いつものように夜に菌固め餅を食べた。殿上での酒宴に、田向長資朝臣・木幡雅藤朝臣ら、藏人頭以下、殿上人ほぼ全員が参列したそう。

三日、晴。前日同様、年始のお祝いをした。聞くところによると、上皇様のお薬に相伴する役は西園寺実永前右大臣で、田向長資朝臣がお薬を配る役をしに行ったそう。

#### 千秋万歳が来る

四日、曇。京あたりでは雪が降ったらしい。この辺りは降らなかった。いつものように千秋万歳(せんずまんざい)の門付け芸人が来た。

五日、晴。音楽会を始めた。平調の曲七つと朗詠などをした。特にお祝いをした。長資朝臣も音楽会に参加した。

今夜は叙位で、執筆役は二条持基左大臣だそう。長資朝臣が正四位下に叙された。

七日、晴。宵のうちに雨が降った。今日は人日の節供である。「たいへん幸せだ、幸せだ」と予祝した。

朝廷の白馬宴会、実施責任者は洞院満季大納言、次席の実施責任者は公卿七人だそう。西大路隆富が少将となり、警備責任者に加わった。警備責任者として初めての出仕だという。

#### 光台寺風呂始め

八日、晴れていたが、夕方に雪が降った。光台寺で新年のお風呂開きがあった。近年はこの八日にお風呂開きをするのが佳い例となっている。

住職が一献の酒宴を準備してくれた。丁寧なおもてなしで、お風呂開きをお祝いした。毎年春先にお風呂開きに呼ばれるが、風呂に入っただけ、一献の酒宴に招かれたのは初めての事である。田向経良三位以下がこの酒宴に同席した。

今出川家に年賀状を送った。いつものようにお膳などを今出川家に送った。寿蔵主が参賀に来た。

九日、昨夜から寒い嵐となり、雪が降った。朝になったら、さらに大雪が降った。指月庵に行き、雪景色の眺望を観た。風景が興味深いこと極まりない。しばらくしてから宮家へ帰った。

十日、晴。大光明寺長老が新年の挨拶にいらっしやったので、お会いした。寿蔵主が一献の酒を持ってきてくれた。惣得庵からも一献の酒が送られてきた。惣得庵主は年老いて身体が利かないので、挨拶しに来れないそうだ。一献の酒が重なったので、数献の酒宴となった。香雲庵御寮の真幸も来てくれた。

十一日、晴。早朝、御香宮へ参詣した。山田宮・権現などにも同じくお参りした。田向経良三位以下を連れて、宮家に戻った。長男や妻の二条も同じくお参りした。

#### 京都から松拍が来る

今日から松囃子の芸人たちが来た。猿楽などいろいろな芸能を見せてくれた。褒美の品や酒などを与えた。彼らはその場ですぐに酒を飲み、いつものように乱舞をした。

西大路隆富が一献の酒を持参して来た。冷泉正永や島田益直も参賀に来た。今出川家や藤原能子典侍殿、それに宮家の男女から、いつものように一献の酒がそれぞれ進上されてきた。

終日、酒宴をして、いつものように音楽や乱舞をした。生島明盛・行光・小川禅啓・広時らを御前に呼んで酒を与えた。乱舞はとても面白かった。

この十一日の酒宴は長年変わらず続けてきたものである。めでたいこと限らない。皆深く酔ってしまった。夕方、酒宴は終わった。しかしその後も廊御方の部屋でまた酒盛りがあった。

十二日、晴。綾小路信俊前参議が参賀に来て、酒一献を持参した。数献の酒宴をした。その後、音楽会をした。万歳楽・三台急・甘州・太平楽急・朗詠・五常楽急を演奏した。綾小路信俊前参議・太鼓を打った田向経良三位・田向長資朝臣がこの音楽会に参加した。

冷泉正永が帰っていった。後小松上皇様への年賀状を書いて、冷泉永基を通して上皇様へお送りした。

十三日、晴。町経時朝臣が参賀に来たので、対面した。殿上の間で酒を勧めた。

#### 大勢のお供がいて、うれしい

大光明寺へお参りした。綾小路信俊前参議・田向経良三位・庭田重有朝臣・町経時朝臣・田向長資朝臣・西大路隆富も一緒にいった。大勢のお供がいて、うれしい。

崇光上皇に焼香した。次に地蔵殿で長老とお会した。お茶のもてなしがあった。長老からいつものように、杉原紙十帖と御扇の引き出物が献上された。田向三位と重有朝臣にも同じく扇が与えられた。それ以外のお供の者たちには何も与えられなかった。毎年だいたい、このような感じである。しばらくして宮家へ帰った。

#### 足利義持への年始の挨拶

その後、経時朝臣と隆富は出ていった。長資朝臣は、京へ出かけていった。清原常宗へ手紙を書いた。室町殿へ新年お慶びのご挨拶をお伝えるよう、長資朝臣をとおして、常宗へ言付けした。

夜に音楽会をした。壱越調の曲を十、それに朗詠などをした。綾小路前参議も一緒に演奏した。

陰陽師の賀茂在方が御祈祷始めとして御撫で物を献上してきた。

## 七十四歳の清原常宗は老衰で動けない

十四日、晴。長資朝臣が帰ってきた。清原常宗は七十四歳になる。とても老衰していて、室町殿にも何度か出仕を止めたいとお願ひして、お許しがでている。それでもう室町殿の御所へは出仕していないという。それで年始お慶びのことを室町殿へお伝えするのは難しいですと言っていたそう。

## 闘茶の会

急に闘茶の会が開かれたので、賞品などを提供した。いつものように一献の酒宴があった。綾小路前参議・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・寿蔵主らが闘茶に参加した。伏見荘の村人たちは呼ばなかった。

夜に音楽会をした。盤渉調の曲を七つと朗詠などをした。綾小路前参議一人だけが音楽会に参加した。

聞くとところによると、お昼に京の中御門大路と東洞院大路の交差点付近で火事があったそう。

十五日、晴。早朝の御粥、その後の強飯などで、いつものように小正月のお祝いをした。綾小路信俊前参議以下が参加した。

## 返礼の闘茶の会

闘茶の会があった。昨日の返礼として、面々が準備したという。賞品は面々が献上してくれた。その献上品は、綾小路前参議が三種類の品、田向三位五種類、重有朝臣二種類、長資朝臣二種類、慶寿丸二種類、寿蔵主三種類で、それぞれがとても面白い物ばかりであった。

しかし誰も一等賞はとれなかった。それで賞品は、昨日のように、闘を引いて皆で分け合った。醍醐寺の稚児である聖乗も闘茶の会に加わった。去年は闘茶の会をしなかった。このように中絶していたところ、再興できたことを心から祝った。

夕方に伏見荘の村々から囃子物の行列が来た。先ず石井村、次に舟

津、次に山村の木守寺の者たちが来た。そこでいつものように三毬杖を焼いた。そして各々に酒樽を与えた。見物の者たちが大勢集まった。

## 当年は天下飢饉

囃子物の飾りに特筆すべきものはなかった。今年は全国的に飢饉なので、民衆の力が微弱になっている。それで、形だけでもお祝いの気持ちを表したことのようだ。

囃子物の者たちが帰っていった後で、一献の酒宴をした。酒宴が終わって、殿上の間で侍臣や女官たちが十種香(※)をしたそう。

さて今日、漢高三尺剣(※)という朗詠を習った。年老いてからの物学びだが、綾小路信俊前参議が宮家にいるので、彼に教わったのである。今夜は月蝕である。

※十種香(じしゅこう)：四種の香を三種は三包ずつ一種は一包で、合計十包をたいて聞き当てる香の遊び。

※「漢高三尺剣」：『和漢朗詠集』帝王六五三。

十六日、晴。いつものように身を浄めた。音楽会をした。太食調の曲十と朗詠二首をした。綾小路前参議と長資朝臣が参加した。

十七日、風に吹き飛ばされながら、雪が時々降った。朝早く音楽会をした。双調の曲を七つ。次に黄鐘調の曲を五つと朗詠をした。音楽会が終わって、綾小路前参議が帰っていった。綾小路は宮家滞在中、唐楽の六調子すべてで笛を吹いてくれた。

さて室町殿への年始ご挨拶の件だが、勧修寺経興検非違使別当に私の年賀状を渡して室町殿へお渡しするように、綾小路前参議に言付けた。勧修寺は連絡役の伝奏(てんそう)に任命されたのだから、室町殿への取り次ぎ役としては適任であろう。

天皇陛下への年始ご挨拶は、いつものように典侍殿を通して申し入れた。

十八日、晴。綾小路前参議が書状で連絡してきた。勧修寺の屋敷へ向か



ったところ、勸修寺は「室町殿への取り次ぎは難しいです」と言ったそう。再三、綾小路が粘ったところ、「それではまず裏松（※）に頼んでみてください。もし裏松も清原常宗も辞退したら、私に取り次ぎをするようにという内容を書き載せた、伏見宮様の命令書を下さったら、取り次ぎ致しましょう」と返答したそう。それで勸修寺が言ってきたように、重ねて命令書を書いた。

近日は、すべての事において薄氷を踏むような時節なので、勸修寺は取り次ぎをためらっているであろう。また私のような不肖の者を取り次ぐことに差し障りを感じているのかもしれない。どうであろうか、どうであろうか。

田向三位と長資朝臣親子は、石清水八幡宮へ参詣しに行ったそう。

※「裏松」：裏松家は烏丸家の庶流で、後掲一月二十四日条のように貞成は裏松と烏丸を混用している。したがってこの裏松は烏丸豊光かもしれない。

十九日、晴。大教院隆経法印が参賀に来了。少し酒を飲ませた。田向経良の息子である法安寺の具侍者らも参賀に来了。

#### 万秋楽の秘曲を妙音天に奉納する

夜に音楽会をした。盤渉調の曲七つと朗詠などをした。そして万秋楽の秘曲を妙音天に奉納した。長資朝臣も一緒に演奏した。

重有朝臣も石清水八幡宮へ参詣に出かけたそう。

二十日、晴。大光明寺へお参りして、父・大通院に焼香してきた。宮家の女性の二人の尼も同じくお参りした。

#### 詩学大成

具侍者が詩学大成を借りたいと申し出てきたので、同書十冊を貸した。このような詩書などを人々に預けておくと、後日になってその本がどうなったか、分からなくなる。そのために、このことを記録しておく。

二十二日、晴。行藏庵珠侍者が参賀に来了。酒小一献分を持参してきた。初めての心遣いで、思いがけない事である。珠侍者とともに酒を飲み、数献に及んだ。重有朝臣以下寿藏主も、この酒宴に参加した。

二十三日、晴。室町殿への取り次ぎの件、勸修寺別当がいまだに差し障りがあるとして拒んでいるので、裏松（※）に尋ねたところ、取り次ぐのに問題ありませんとのことだった。

それに室町殿のご意向を伺い、問題なければ、今後もお取り次ぎしますと、丁寧申し入れてきた。うれしかった。

※「裏松」：一月十八日条の註記を参照のこと。

#### 今出川公行・実富親子の仲違い

二十四日、晴。今出川実富大納言に理解不能なことがあり、なんと父親の今出川公行左大臣と仲違いしているそう。これは、去年の冬からの事だ。この事は小耳に挟んではいたが、はっきりとは知らなかった。しかし、最近、今出川左大臣から詳しい事情を聞く事ができた。

#### 近江国国衙領

近江国国衙領（※）は今出川家の領地であり、家司の重徳が管理している。その国衙領の代官職を交替させた。新しく任命された代官は、烏丸豊光中納言（※）の若い侍だという。

#### 新代官烏丸家青侍が殺される

その新任代官が現地入りしたところ、以前の代官の仕業で、新しい代官を打ち殺してしまったそう。実富大納言は、公行左大臣の命令だと称して、偽の書類・偽の花押を作成して、新代官を用いないようにと元の代官に命令した。その命令により、元の代官は新代官を殺害したという。

烏丸としては自家の若い侍が殺されたのだから、腹を立てるのは無理もないことである。この件は、烏丸からすぐに義持將軍の御耳に入れたそう。そして実富卿の所行は理不尽なことであるというこ

判断が下されたそうだ。

この領地は今出川家の家司である重徳のご恩地所領であるが、犬上という実富大納言の領地と錯綜しているらしい。そのために、実富はこのような命令を出したようだ。いろいろと問題が重なっているようで、ここに詳しく記録することはできない。

### 今出川家を相続するのは次男の公富

もともと公行左大臣と実富大納言は仲が良くなかったので、今回の件でお互いに絶交することになった。実富の弟である公富は、さぞや喜んでいることであろう。今出川家を公富が公行から直に相続するのは、当然のことだからである。

※国衙領（こくがりょう）：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような私領になっている。

※「烏丸豊光中納言」：原文では「裏松中納言豊光卿」とある。前述したように裏松家が烏丸家の庶流であることから、この年の日記では両者が混用されている。ここでは、幕府による恩寵の深い烏丸豊光と解した。

二十八日、晴。祐譽僧都が参賀に来た。一献の酒を持参してきたので、酒宴をした。

### 正月節養

さて廊御方が節養（※）として酒宴の用意をしたという。それで廊御方の部屋に行った。宮家の女性たちや男どもが皆、集まった。椎野寺主が来た。ちょうど良いところに来たので、特にうれしかった。椎野の母親である廊御方としてみれば、特にうれしかったことであろう。酒は数献に及び、いつものように音楽や乱舞が行われた。局女や年老いた尼が特に乱舞をするのは、とても面白い。廊御方のお部屋で節養するのは、今春初めてのことである。めでたいことである。

さて裏松に書状を送った。室町殿へ新年のお慶びを伝えさせた。今日、裏松の屋敷に室町殿がお入りになるそうだ。

※節養（せつやしなひ）：正月などの節日に酒食を振る舞う慣習。『日本国語大辞典』第二版ではこの箇条を用例としてあげ、「正月に妻が夫などを招いて祝宴を催すこと」と解しているが、狭義に過ぎよう。室町時代の若狭国太良荘では、預所が荘民に節養をしている（『福井県史』通史編二中世、第一章第六節二、福井県、一九九四年）。近世以降の「節振舞（せちぶるまい）」と同様のものと思われる。

二十九日、晴。椎野殿が一献の酒宴を用意なさった。田向三位以下が参加した。

### 連歌始

さて今年の連歌始めが遅れて、いまだ開催されていない。正月中に開催するのが当然のことなので、皆に連歌会をしようと勧めた。それで、急に開催することになった。一献の酒宴を寿蔵主に準備させた。午後三時に始めて午後十一時に百韻が詠み終わった。参加者は椎野以下、いつもの面々である。

二月一日、晴。「二月朔日となつて（※）、めでたい兆しがある。とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。※「二月朔日となつて」：原文では朝廷の儀礼である「告朔」（こうさく）と書かれているが、単に月が改まった意に解した。

### 綾小路信俊の養子資興が死ぬ

三日、雨が降った。綾小路資興は綾小路信俊の養子だ。その資興が、今日亡くなったそうだ。この十年余りずっと病んでいて、その状態は臍臍としていて気が狂っていたようだ。それですっと出仕しないで、家に閉じこもっていた。遂にあの世に行ってしまったということ、とてもかわいそうだ。

綾小路家を相続する人がいなくなってしまった。信俊前参議は六十

過ぎなので、たとえ養子ができたとしても、養子に音楽の技芸を受け継がせることは難しいだろう。郢曲（えいきよく）はもはや断絶するしかないようだ。

朝廷のため、また綾小路家のためにも、歎いて余りあることだ。ただし音楽の道の神様による加護があれば、きつと断絶することはないと信じたい。

五日、雨が降った。綾小路前参議が悲しんでいるので、庭田重有朝臣を使者としてお見舞いに行かせた。

また後小松上皇様へ近江国山前荘に関する詳しい事情を申し入れにも行かせた。冷泉永基朝臣といろいろ相談して、重有を使者として向かわせたのである。

### 今出川公富の和歌

今出川公富新大納言が庭先の梅の花一枝を送ってきた。

待つ人も 問わぬ伏見の 梅の花

折りてやせめて 君に見せまし

新大納言へ梅の枝を付けて送った返歌

君片折る 情けをぞ添へて 見るからに

色香ぞ深き 梅の一枝

色も香も 伏見の梅に 及びなき

庭の梢の 盛りをも見よ

七日、晴。重有朝臣が帰ってきた。永基朝臣といろいろ相談してきたそうだ。この宮家が経済的に困窮している様子を上皇様のお耳に入れたところ、上皇様のご意向としては宮家をないがしろにはしないのとことだったそうだ。

近々、室町殿は伊勢神宮や石清水八幡宮に参詣するご予定だそうだ。そこからお帰りになった後に、室町殿は近江国山前荘の件を申し上げるのがよいと、永基朝臣は助言してくれたそうだ。

重有は今出川家にも行って、数時間、雑談してきたそうだ。実富大納言の不義の行いについて、いろいろとお話しになったそうだ。

椎野寺の僧である観娛が来た。椎野寺主の母親である廊御方の部屋で観娛と対面し、酒を飲んだ。

### 梅の花見

八日、晴。梅の花が盛りなので、近辺を遊覧して歩いた。梅林庵・隆城寺・退蔵庵・蔵光庵などを観て歩いた。しばらくして宮家へ帰った。

小川禅啓が小一献の酒を持参してきたので、廊御方の部屋で飲んだ。

田向三位以下、寿蔵主・善基らも参加した。そのうちに無礼講の酒盛りとなった。その後、宮家の女性たちは梅林庵の梅を観に出かけた。

私・長資朝臣・善基たちは酔っ払ったので、庭田の屋敷に向かった。途中、梅林庵から帰ってきた女性たちを引き留めて、庭田の屋敷に無理やり引きずり込んだ。そこで数献の酒宴をした。その後、酒盛りととなり、とても面白かった。すっかり深酔いしてしまった。庭田重有はとても楽しかったということで、私に引き出物を献上した。椎野寺主にも同じく献上していた。

九日、晴。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。平調の曲を十、演奏した。太鼓の田向三位と長資朝臣らも参加した。

### 松林庵玄超

松林庵の玄超が酒一献分の錢などを持参してきた。御前に呼んで、酒を飲ませた。それで、すぐに帰っていった。玄超は父・大通院の時代には宮家へ足繁く通い、毎回来るたびに御用に役立っていた。しかし私の代になってからは疎遠になっていた。まったく御用に立たないので、田向三位を通して宮家に来るように命じた経緯がある。それで、その挨拶に来たというわけである。

聞くところによると、室町殿は今日、石清水八幡宮に参詣するそうだ。そして明後日に行列を整えて、社参する予定だという。また 来

たる十七日には、伊勢神宮に参詣するそうだ。晴れがましい儀式となるようだ。去年、神宮などに祈願してご病氣から回復した、そのお礼参りだそうだ。

### 法安寺の風呂招待

十二日、晴。法安寺が招待してくれたので、行った。椎野寺主・東御方・廊御方・上臈局・妻の二条局を連れて行った。田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸らもお供させた。先ず一献の酒宴があった。次に風呂に入った。その後、御膳が出された。丁寧なおもてなしである。例年の通り変わらず、うれしいことである。三献終わってから、座を立った。

法安寺の薬師堂に参詣して、焼香した。帰りの道すがら、称名院に行き、梅の花を見た。院主の良賢ができて、ご参詣恐れ多く存じますと挨拶してくれた。

土倉の宝泉のところに行ったが、留守だった。土蔵のあたりを遊覧した。あまりよろしくないことだが、亡くなった父の時にも、お忍びで宝泉の梅をご覧になっていた。この先例にのっとり、梅を一覧してきた。

次に梅林庵の梅を一見した。花盛りで素晴らしかった。ここで連歌を一折り分、行った。その時ちょうど世尊寺行豊朝臣が来たので、うれしかった。今春、初めて行豊は伏見に来た。

私が発句を詠み出した。梅林庵の庵号の内容を述べた句である。

色も香も 満ちたる梅の 林かな

緑立ち添う 松は幾千代 椎野寺主

夕霞 山洗わる、 月出て 綾小路三位（田向経良）

良賢が御酒を持参してきた。称名院の梅をご覧になった、そのお礼だという。梅林庵主の光意も同じく御酒を持参してきた。お酒の献上が重なって、皆、楽しんだ。酒宴は数献に及んだ。とても酩酊した。

春の日が暮れようとした頃に五十韻詠み終わり、帰った。楽しい酒宴が度重なって、思いがけず賑やかであった。

さて兄・葆光院の御仏事を蔵光庵で型通り執行した。経済的な余裕がなかったので、御所での御仏事は行わなかった。

### 後円融上皇の中国産沈香の木槌

十三日、晴。椎野が自分の寺へ帰った。法安寺住職が来た。昨日のお礼を言い、中国産の沈香で作られた木槌（※）を献上してきた。これは、先年、亡くなった後円融上皇が伏見にいらした時、法安寺へお下しになったものだという。今まで大事に保存してきたので、御引き出物として宮家に進上することだった。

### 称名院は土倉宝泉の寺庵

さて土倉の宝泉が酒一献分の錢を献上してきた。称名院は宝泉の寺庵である。「称名院の梅を昨日ご覧になられて、恐れ多く存じます。ちように外出していましたので、ご覧になられたことを存じませんでした。そのお礼でございます」とのことだった。神妙である。

廊御方の部屋で酒を飲んだ。田向三位が京都にでているので、その代わりに田向経良の妻の芝殿を呼び出した。芝殿はすぐに来た。重有朝臣以下、村人の小川禅啓や行時らも酒宴に参加した。

香雲庵御寮真幸が梅の枝や梅の花を入れた匂い袋（※）などを持参してきた。素晴らしい花である。真幸の父親である四条隆直卿の庭先に咲いていた花だそうだ。

※「木槌」：原文では「破槌」と書かれている。

※「梅の花を入れた匂い袋」：原文では「花袋」と書かれている。

十四日、小雨が降った。今日は彼岸の初日である。田向三位が帰ってきた。椎野の寺である浄金剛院に行き、昨晩はこの泊まると言っていた。祐誉僧都が涅槃会のお供え物二種類を進上してきた。



## 涅槃会

十五日、晴。涅槃会へのお供え物を宮家の男女全員が献上した。涅槃像の絵を懸けた。涅槃講の式を即成院の善基と梵祐がいつものように勤めてくれた。釈迦の念仏を皆で唱えた。

水無瀬殿へお供え物三種類を進上した。それは、一組の藤枕・大呉器一つ・杉原紙十帖である。故水無瀬具隆三位入道が残した所領を重徳少将が相続したそう。相変わらず引き続きお願いいたしますというので、お供え物を差し上げたのである。

宮家の女性たちが梅林庵の梅を遊覧しに行った。帰りがけに廊御方のお部屋で酒宴があった。小川禅啓がその準備をしたそう。

十七日、晴。今日はお彼岸の中日だ。いつものように身を淨めた。涅槃会のお供え物を降ろして皆に配った。善基と梵祐には五・六種類与えた。また宮家の男女には圖を引かせてお供え物を分け合った。面白かった。

さて聞いたところによると、学問僧の竜山和尚が京都三条堀河の千手堂に寄宿して、法華經を説法なさったそう。その千手堂に盗人が押し入り、堂主の老僧を刺し殺し、お堂に放火して炎上させたそう。

## 勸進錢を地中に埋める

その訳は、大般若經を新しく書写するため集めた寄附金三十貫文を御堂の床下の土中に埋めたそう。盗人はそれを知り、奪い取ろうとして、堂主を殺して放火したらしい。

## 殺人犯は知識竜山とその弟子たち

これは、実は学問僧の竜山の仕業であることが明らかとなった。それですぐに竜山は逮捕された。尋問したところ、自白なさったそう。弟子の僧たちも同じく逮捕され、牢獄に収監されたそう。重罪であるので、死刑に処されるらしい。

この学問僧は去年の冬、伏見荘の新堂に数日間逗留し、法華經を説

法なさった。近所なので、宮家の男女が説法を聴きに行った。すばらしい説法だったと聞き、私もお忍びで聴きに行った。

ところがこのような悪評を聞いた。末法の世とはいえ、僧がこのように重罪を犯し戒律を破るとは、未曾有のことである。

十八日、晴。今日、室町殿は伊勢神宮に参詣する。お供の公卿は、木造俊康大納言・日野有光中納言・万里小路時房中納言・裏松中納言・東坊城長遠参議で、殿上人は六・七人だそう。去年の病気が治って、病氣平癒の祈願が叶ったためのお礼参りだそう。

## 京都は乞食と餓死者で充滿している

さて去年は日照りや飢饉だったので、諸国の貧しい人々が上京してきた。そのため、京都では乞食が充滿している。それに餓死者も数知れず、その死体が路頭に転がっているそう。

それで將軍からの命令で、諸大名が五条河原に飯屋を建て、お粥の施しをした。それを食べたことが身体に響いて死んだ者はまた千万もいるという。

今春もまた疫病がひどく流行ったため、万人が死去したらしい。

天龍寺・相国寺でもお粥の施しをしたら、貧しい人たちが大勢集まって来たそう。

## 生島明盛も疫病にかかる

生島明盛法橋はこの十一日からその疫病にかかり、とても重態だという。かわいそう、かわいそう。盛源は疫病が移らないように、急いで家を出たという。

## 学問僧竜山は無罪で、京都から追放される

聞くところによると、学問僧の竜山は獄舎に監禁されていた。しかし無実であるとの申し開きをして、牢屋から出され、京都を追放されたそう。犯行は竜山の弟子たちの仕業らしい。

庭田重有朝臣がよい酒器をみつけてきた。その酒器を用いて、順番

に幹事となつて酒宴を準備しようということになった。これは面白そうだ。まずはじめに、重有朝臣が幹事を勤めた。

十九日、晴。昨日から始めた当番幹事として田向経良三位が準備をして、酒宴をした。

### 実意法印

さて豪融僧正が亡くなったのは今年の冬、年末近くだったので、お見舞いにも行っていない。今日、実意法印が豪融僧正の遺産を相続したので、お見舞いの使者を送った。実意は三条公為三位(※)の子息で、明王院と呼ばれた。この法印と私は親戚であるが、疎遠な仲であった。

来月、室町殿御台御所の日野栄子殿・足利義満殿後室である西御所、この両御所が熊野に参詣するそう。その先達(せんだつ)役をこの法印にお命じになったという。亡くなった豪融僧正が御先達であつたので、その先例に基づいて、この法印を先達にお命じになったそう。

※三条公為三位：貞成の母である三条治子の兄弟。中川三位と呼ばれた。

二人の父親は三条実治。

二十日、晴。お彼岸の最終日なので、身を浄めた。当番として東御方が早朝に酒宴の準備をした。即成院にお参りして、心静かに念仏をした。田向三位以下、寿蔵主らをお供に連れていた。

二十一日、晴。当番として長資朝臣が酒宴の準備をした。

二十二日、晴。当番として廊御方が酒宴の準備をした。

二十三日、晴。用健がいらっしゃった。今年始めてのご来訪である。去年より指月庵に滞在なさっていたが、その後、嵯峨へお帰りになっていた。

室町殿は、今日、伊勢神宮参拝へお出かけになったそう。

二十五日、雨が降った。御香宮へ参拝した。願い事があるので、願書を書いて奉納した。

北野天満宮に奉納するための連歌会を開催した。参加者はいつもの

通りである。当番として兄の未亡人である上臈局が酒宴の準備をした。

二十六日、晴。大光明寺の花が盛りなので、一覽しに出かけた。特に桜と桃の花が盛りだった。とても素晴らしかった。心より堪能した。田向三位・重有・長資ら朝臣・慶寿丸・寿蔵主らを連れて行った。

伏見御所の旧跡に咲く花も同じく見に行った。ゼンマイなども手折った。

そこへ即成院善基が来た。即成院へ強引に連れて行かれて、一献の酒宴でもてなされた。花見酒のお弁当代わりで、これも少なからず面白かった。

二十八日、雨が降った。いつものように当番として私が型通り酒宴の準備をした。これで酒宴の当番も一巡した。そして風呂に入った。

### 惣得庵主は老病が悪化している

その後、惣得庵御寮と明元たちが酒一樽を持参してきた。宮家前庭の花を見に来たそう。今春初めての来訪なので、一緒に酒を飲んだ。惣得庵主は年老いて病氣だそう。この頃、病状はさらに悪化しているという。かわいそうなことである。

### 近江国山前荘

二十九日、晴。近江国山前荘のことに関する私の書状を、冷泉永基朝臣を通して後小松上皇様へ送った。この荘園のことを室町殿へ取り次ぐことを上皇様が内々に仰っていると、永基が知らせてくれた。それで、そのことを改めて上皇様へお願いした次第である。

宮家が経済的に困窮している状況は、上皇様のお耳にも達している。その状況を改善するためにも、この荘園のことをしきりに何とかしてあげようと上皇様は仰っているそう。上皇様のお気持ちには、恐れ多くもうれしい限りである。

遊山に出かけた。田向三位以下を連れて行った。山に生えている松を七・八本ほど掘らせた。浅野康知を責任者にして、それらの松を前

庭に植えさせた。

三十日、雨が降った。前庭の花見をした。皆に、肴を一種類と酒瓶一つをそれぞれ持参するように、兼ねて命じておいた。その人々は、東御方・廊御方・上臈・二条・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・寿藏主・善基らである。彼らは各々、肴と酒瓶を持参してきた。それでいつものように酒宴をし、さらに酒盛りとなった。

#### 伏見荘に火車が来た

この近所あたりで火炎が燃えさかっているのが見えるという。皆がそれを眺めている。どうやら御香宮巫女の家あたりらしい。この巫女の家がある村は、病気になる者が多い。もしかしたら、火車が来たのかもしれない。または火柱だろうか。いずれにしても不思議なことだ。とても不審なことである。

三月一日、晴れているが、寒い嵐が吹いている。風に飛ばされながら雪も降っている。いつものように月始めのお祝いをした。

#### 花盛りの桜に雪が降り積もる

二日、空が明るくなってから、雪が降り出した。三センチばかり積もった。その雪景色は、はなはだ興味が深い。花盛りの時分に雪が降ることとは、今まで見覚えがない。希有なことか。それで、一首詠んだ。

思いきや 花こそ雪と 散る上に

重ねて雪に 積もるべしとは

重有朝臣にこの一首を送った。庭田家の遅桜が咲く時分に花見に行く兼ねてから約束していたので、もう一首も添えた。

まだ見ずよ 昔は知らず 花の上に

かかる深雪の 積もる情けを

遅桜 盛りを待つも 程久し

かく珍しき 雪を問わばや

御返し

重有朝臣

さぞなげに 昔は知らず この比の

花と雪とを 枝に見んとは

遅桜 盛りは待たじ 如何にして

梢の雪を 花と見せまし

落花を蓋に載せて、田向三位に送った。

またかゝる 情けは見ずよ 散る花に

重ねて積もる 今朝の白雪

我も問わず 人も問い来ぬ 庭の雪

情けなしとや 花も恨みん

返し 三位

さぞなげに 今朝はまことの 雪までも

散りしく花の 影に添うらし

花と雪 嵐も分かず 誘い来て

庭の小松に 吹きぞ溜めぬる

田向経良の妻である芝殿が酒樽を一つ持って来た。和歌の贈答に關わって、やってきたのであろうか。雪見酒は興味があつた。

#### 伏見荘丸目池の石橋

さて九条満教関白から書状が届いた。唐橋在豊朝臣がこの書状を持って、使者としてやって来た。伏見荘の丸目池に橋が架かっている。この橋をいただきたいという内容の書状だった。室町殿が九条家に來臨されるので、前庭の池庭を飾るには石橋が重要であるとのことだ。とりあえずご返事は改めてこちらから申しますと言って、唐橋を帰らせた。

このような橋があるのかどうかさえ、私は知らなかった。それで小川禅啓に尋ねたところ、その池に確かに橋はありますとのことだった。九条家は古くから特別な誼のある間柄なので、石橋を差し上げるのに何の問題もない。それに九条満教関白からの書状がこれが初めての事

でもある。

九条満教は礼節を心得ていて、私への手紙に「恐惶謹言」と書き止めをし、宛名には「人々御中」と添えられていた。さて関白家への返事は、どのような書札礼（しよさつれい）で書き送ったらいいいものやら。私は知らないで、皆と相談した。

#### 上巳の節供に闘鶏をする

三日、晴。今日三月三日の上巳の節供は、昔から宮中で曲水の宴をする縁起のよい日だ。「とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように闘鶏を六々七番行った。それから御節供のお祝いで、いつものように三献の酒宴をした。

#### 無官の皇族として関白に対して「恐々謹言」と書いた

さて九条関白へのお返事を長資朝臣を使者として送った。石橋を差し上げることに問題はありません。どうぞお使い下さいと返事をした。問題の書札礼だが、書き止めは「恐々謹言」で、差出人として私の名前を直接書いた。

宮家の皆と相談したら、書札礼についての意見はまちまちだった。

書き止めは「恐惶」だけにした方がいいという意見もあった。親王と大臣は同格の礼にすべきだというのである。

しかし私のように官位のない皇族としては、関白に対して「恐惶謹言」がいいのではないかという意見もあった。

それぞれの言い分はもつともであるが、私としてはただ「恐々謹言」と書くことにした。後からどのような非難があるだろうか。書札礼に詳しい人に尋ねてみたいものである。

今日から琵琶を百日間稽古することにした。近年、この日から稽古を始めるのが佳い例となっている。

四日、雨が降った。九条殿から雑役夫が、石橋を運び取らせにきた。九条家の家司である唐橋在豊朝臣から書状が来て、九条殿が喜びであ

ると、いろいろと書き連ねてきた。

長資朝臣が帰ってきた。昨日、九条家に行つて、在豊朝臣が取り次いでくれたそうだ。九条殿がお喜びだったと在豊が言っていたそうだ。廊御方が仁和寺へお出かけになった。この八日が、廊御方の亡くなった母上の十三回忌だという。それでお墓参りなさったそうだ。廊御方は夕方には宮家へお帰りになった。廊御方のお部屋で、直会の酒宴をした。

五日、晴。前庭の桜だけが一本、散り残っている。昨日の雨で、花の色がなお素晴らしくなった。

夜の雨 晴る、日影の 朝湿り 移ろう花の 色添えならぬ  
花を愛でて、一首の和歌を詠んだ。

#### 書札礼に関する、今出川公行の叱責

さて関白に対する書札礼について今出川公行前左大臣に尋ねたところ、「恐々謹言」ではへりくだり過ぎだそうだ。ただ「穴賢」と書き止めて、お名前を書くだけで十分と存じますという。「恐惶」などと書き止めるなど、以ての外だということらしい。

皇族の最末端の方々のことならいざ知らず、この伏見宮家御所などには無官であろうがなろうが関係なく、親王家としてのプライドをお持ち下さいと叱られた。公行の意見はもつともなことだと納得した。私が軽はずみで「恐々謹言」と書いてしまった。およそ親王家の大臣に対する書札礼は「穴賢」と「名前」だけでいいようだ。今後のために記録しておく。

#### 上巳の祓え

六日、三月三日上巳の祓えを陰陽師の賀茂在方朝臣が献上してきた。聞くところによると、国母の二位殿日野西資子殿・室町殿の御台である日野栄子殿・義満殿の後室である西御所らが、来たる十六日に熊野詣でをするそうだ。先達は明王院だそうだ。



八日、晴。廊御方のお母様の仏事が安楽光院で執行された。

#### 玉葉集を細川満元が返してきた

さて細川満元管領が去年の冬に申し出があつて貸し出した玉葉集が、返されてきた。

#### ゼンマイ（紫藤）取り

九日、晴。伏見御所の旧跡にでて、ゼンマイを取った。東御方・兄の未亡人である上臈局・私の妻の二条殿・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・庭田慶寿丸らを連れて行った。帰ってから一献の酒宴などいろいろあった。

先日、宮家の女性たちが梅林庵の花を遊覧した。その帰りがけに庭田家で突然の酒宴をしてもらった。そのお礼を宮家の女性たちと重有朝臣が準備していたそうだ。田向三位・寿蔵主・善基らも追加のお酒を持って来た。これは、あの時の酒宴の面々である。

その酒宴は数献に及んだ。前庭に落ちた花を愛でた。少なからず楽しかった。

十日、晴。松山に行った。小松を二―三本引き抜いて、庭に植えた。

#### 天下飢饉

さて御香宮猿楽の開催日が延期となった。これは日本全国が飢饉になつていたので、村人たちが延期させたそうだ。

十一日、晴。室町殿がまた伊勢神宮にご参拝するそうだ。今日、ご出発なさつたという。

#### 事文賽打

十四日、晴。事文（※）があつた。いつものように宮家の上下男女皆が賽を振った。一献の酒宴が終わって、超願寺へ行き、前庭を見物した。用健は留守だった。

さて今日、熊野詣でに出かける予定の二位殿以下が、京都市内の諸神を巡礼したそうだ。その行列はとても美しく、見物人が群集したそ

うだ。室町御所で、若君の足利義量將軍が二位殿たちを坂迎え（※）なさるらしい。

※事文（ことぶみ）：照井貴史氏によると、事文は怪異などが起こった後に世間に出回る文書で、そこには怪異による災難を避けるために、呪いをしたり、賽を振ったりすることが指示されている。その後、酒宴するのが通例。照井貴史『事文賽打』について（『アジア文化史研究』六号、二〇〇六年）。

※坂迎え（さかむかえ）：遠い旅から戻る者を村境などで出迎えて、酒宴をすること。

十五日、晴。聞くところによると、朝廷の宿直の当番が編成替えになつて、田向長資朝臣は五番の組になつたそうだ。それで、今日、朝廷に出仕しに行った。公卿の宿直当番も同じく変更になつたそうだ。

#### 国母の日野西資子ら一行、熊野参詣に出発する

十六日、小雨が降った。熊野参詣の人々が今日出発なさつたそうだ。参詣者たちは、先導者である明王院実意法印の本坊を身を淨める所とした。そして皆ここから一緒に旅立つた。

参詣者は、天皇の母である二位殿・室町殿の妻である御台・亡くなつた北山殿すなわち足利義満殿の妾だった西御所・室町殿の妹である光照院・北畠対御方・坊門局・日野資教一位禪門の妻・烏丸豊光中納言（※）らである。およそ厳選された女性たちは、十二人である。

この参詣の男女が乗った輿が十六丁。その行列の粧いは、とてもきれいだつたという。それでとても大勢の人たちが見物に群れ集まつたそうだ。田向経良三位らが見物してきて、私に話してくれた。

#### 足利義持、伊勢参宮に出発する

室町殿は朝早く伊勢神宮へお出かけになり、直接、身を淨める所にお入りになつたそうだ。その所は、事前にご自身で直接お見立てになつて決めた場所だという。その後、見物席で、熊野参詣の行列を見物

なされた。そこでは管領が一献のお酒を用意したという。

さて故北山殿足利義満殿の子息である青蓮院義田殿が今日、日吉大社を初めて参拝するそうさ。きつと一の箱(※)をお開きになることであろう。

#### 綾小路信俊、出家を申し出る

ところで、綾小路信俊前参議は先月三日に養子の資興が亡くなった悲しみのあまりに、出家するという。それで後小松上皇様にお暇を申し入れたそうさ。上皇様はやめなさいとお命じなされたところ、なお強く出家したいと申し入れた。それで上皇様はお怒りになり、それ以上は言葉を交わさなかったそうさ。お許しがでなかったのは勿論のことである。

※「烏丸豊光中納言」：原文では「裏松中納言豊光卿」とある。

※「一の箱」：未詳。天台座主の日吉大社拝堂儀礼の一環としてこの一の箱を開く慣行があったのであろう。義田(後の足利義教)は応永十年(一四〇三)青蓮院に入り、応永二十六年(一四一九)十一月に天台座主となっている。

#### 貞成妻の二条ら、清水寺に参詣する

十七日、晴。私の妻の二条殿・芝殿・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸と宮家の女官たちが清水寺に参詣した。

#### 延期していた年始の節養が行われる

十八日、晴。田向家から招待されたので、行った。宮家の女性たちも皆、行った。年の始めの御節養(せちやしなひ)だという。年始に行うはずであったが、とかく今まで延期になってしまったそうさ。一献の酒宴を丁寧にもてなしてくれて、賑やかな会だった。

#### 宝泉息子の玉寿丸が出家する

さて土倉の宝泉の息子、玉寿丸が近いうちに出家するそうさ。これまで近江国の三井寺に時折、居住していた。それでこの度、その寺で

出家するそうさ。名残惜しいことである。

これまで皆が玉寿丸をかわいがっていたと聞く。これからもずっと宮家に奉仕させたいと思い、御前に呼び出した。そして酒や扇などを与えた。田向三位も同じく扇を与えた。殊に恐れ多いことだと喜びながら、すぐに出て行った。

#### 新茶

五献の酒宴を終えて、新茶を味わった。とても酔ったので、座を起った。田向家から自ら調査したという新茶十袋を献上された。

二十日、雨が降った。室町殿が明日、日吉大社を参詣し、七日間お籠もりするそうさ。そこで御経の供養もするという。布施を配る役として世尊寺行豊朝臣も同行するらしい。田向三位も同じくお供をしに、今日坂本へ向かったそうさ。

#### 北野天満宮一切経供養

また北野天満宮で一切経供養の法会があり、童の舞もあるという。一切経の法会は去年から始められた。毎年行われる法会だそうさ。

二十一日、晴。室町殿が日吉大社にお参りする行列が、京都で晴れがましく出発した。室町殿は白い狩衣のお姿で、輿に乗っている。お供の人たちも白い狩衣である。お供の公卿は日野有光中納言・裏松中納言、殿上人は五、六人だそうさ。

御経供養の導師は心明権僧正、参列する公卿は四条隆直大納言・久我清通中納言・徳大寺実盛中納言で、それに布施を配る役の殿上人四、五人だそうさ。七日間の間、比叡山の僧兵が警備をするという。武家の方々の警備は難点があるので、比叡山の僧侶が警護するのだそうさ。

二十二日、晴。今日から朝廷役人の任命式がはじまるそうさ。執筆役は一条兼良大納言兼左近衛大将だそうさ。

二十三日、晴。陰陽師の賀茂在方朝臣が家の魔除け・身体の魔除けなど

を献上してきた。伝染病が世間に広く流布している。それに備えるための祈禱である。

### 庭田慶寿、侍従に任命される

二十四日、晴。今日は、朝廷役人任命式の最終日だ。慶寿丸が侍従に任命された。初めての任官で、めでたいことである。

さて飢饉のために村人たちが京都に出かけているので、猿楽の出演料を用意できない。それで御香宮猿楽はこの秋に延期となった。

### 御香宮聖慶俊が狂い死ぬ

そのことが神慮に背いたために、宮聖の慶俊が疫病にかかって、気が狂ってしまったそうだ。猿楽を延期するのはよろしくないといろいろと神様のお告げを口走りながら、ついに慶俊は死んでしまった。それで村人たちは猿楽をやるかどうか相談しているという。先例では猿楽を延期すると不吉なことが起こると言われているそうだ。

### 伏見地下一庄の会合

二十七日、晴。猿楽の開催について、今日伏見荘全体の集会があり、御香宮社頭で会議があった。その結果、来月十日・十一日の式日に神事を行うことになったという。もつともなことである。

室町殿は今日、日吉大社からお帰りになったそうだ。

二十九日、晴。毎月恒例の連歌会が、善基・禅啓の二人が当番の幹事となり、いつものように用意された。参加者もいつもの通りである。参加者が少ないので、午後九時には百韻詠み終わった。

先日、三月尽しの題で和歌を集めた。今夜、集まって来た短冊を取りまとめた。ただし和歌を披露することはできなかった。残念である。四月一日、快晴である。「夏の初めで、良い兆しがある。とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

三日、雨が降った。暇だったので、双六の勝ち抜き戦(※)をした。宮家の女性たちも参戦した。長資朝臣も参加した。

※「勝ち抜き戦」：原文では「打ち勝ち」とある。

五日、晴。今日は今年一年間の豊作を祈って、神様に捧げ物をする儀式が行われた。田向経良卿は、京都の松尾社におけるこの儀式の執行責任者となった。経良はこの二三年、この役を命じられて、出仕している。

また双六の会があった。宮家の女性たち・重有朝臣・長資朝臣・寿藏主が参加した。その後、酒を飲んだ。

【頭書】この豊作祈願の捧げ物儀式は、まれにしか行われてこなかった。

しかし近年は毎年行われている。

六日、晴。今日は、後伏見上皇の祥月命日である。いつものように三福寺で法事讃(※)の法会があった。この法会の事務取扱者は綾小路信俊前参議である。

さて例の熊野参詣の一行が明後日に戻ってくるので、平等院で一色義資が御坂迎えの用意をしているそうだ。

### 三方範忠山城国守護代が伏見荘土倉へ課役をかける

山城国守護代の三方範忠入道が伏見荘の二つの土倉へ稈(まぐさ)や酒樽などの租税をかけてきた。両土倉は納得しがたいと抵抗しているそうだ。

※法事讃(ほうじさん)：阿弥陀経と讃文とを交互に唱えて懺悔供養などを行う法会。浄土法事讃。

### 庭田家の遅桜を見物する

七日、雨が降った。庭田家へ行った。私の息子や娘たち、それに宮家の女性たちも皆、行った。遅桜の時分、毎年招待されていたが、今年は慌ただしくて今まで延び延びになっていた。

花見には、芝殿・田向三位夫婦や田向長資朝臣も参加した。雨の中、殊に興味深い風景だった。酒に酔ったので、座を起って帰った。

明日は例の熊野詣での行列を見物しようと、宮家の女性たちが計画

している。それで私もお忍びで一緒に見物しようと思う。寿蔵主がこの件の手配をしてくれている。

### 国母の日野西資子ら熊野参詣の行列を見物する

八日、晴。例の熊野参詣の方々が京都へ戻るのに、この近辺を通るそう  
だ。それでお忍びで輿に乗って見物に出かけた。宮家の女性たち、東  
御方・廊御方・上臈・二条殿、芝殿・玄経・山田御寮真幸、田向三位・  
重有朝臣・長資朝臣・寿蔵主・梵祐、それに局女・女官別当・女官た  
ちはそれぞれ徒歩で出かけた。村人の禪啓以下四〜五人も来た。

### 木幡に見物席を構える

木幡へ行き、見物席を拵えて見物した。参拝者たち数百人が通って  
いった。ところが噂で聞いたところによると、例の熊野参詣の方々は  
船に乗って伏見津に着いたという。道ゆく参詣者に聞いたが、何が本  
当かはつきりしない。ところがまた熊野参詣の方々はすでに平等院で  
船に乗ったといううわさも聞いた。これが事実らしいので、伏見に帰  
ろうと面々が言い出した。とりあえず寿蔵主が用意してくれたお弁当  
を食べた。皆が食べ終わってから、伏見に帰った。帰路、木幡六地藏  
辺りで輿を止めて、ここで皆しばらく見物した。

ところが、熊野参詣の方々はやはり元の道をお通りになつたらしい。  
船に乗ったというのは嘘だったらしい。ちよつとした間にいろいろな  
うわさが飛び交っていて、つまらないことであった。とはいえ、この  
木幡六地藏辺りも本来の道沿いなので、ここで見物しても何の問題も  
ない。

### 行列の様子

午後五時頃にまず一番の先達である山伏が通った。次に明王院。配  
下の山伏十二人が明王院の前と左右を練り歩いていた。いつものよう  
に浄衣であった。浄衣は織物で、同じ色の小袖をその下に着ていた。  
また金や銀の刀を差していた。次に二位殿、御台、西御所。それぞ

れ輿に担がれていた。輿は板輿でよくあるように金属製の飾りが付い  
ていた(※)。輿には四〜五十人に及ぶ駕輿丁が付いていた。この駕  
輿丁たちの主人が誰なのかは分らない。次に身近に仕える男たちが  
十余騎で、各々が浄衣に大口袴をはいていた。次に輿に乗った烏丸豊  
光中納言(※)で、彼に付き従う者たちの輿も数丁あった。次に単衣  
を着ている者たちの騎馬が四〜五十騎。次に身分の低い使用人たちが  
千〜二千人。この行列はおよそ二百〜三百メートル続いていた。希代  
の見ものであった。すべて見終わってから宮家に帰った。

### 斯波義淳の坂迎え

聞くところによると、伏見稲荷大社の辺りで斯波義淳左兵衛佐が御  
坂迎えをしたという。飯屋を二軒建てて、いろいろなご馳走を用意し  
たそうだ。美しく立派で風流なお弁当箱だったらしい。若君の足利義  
量殿もここでお待ちしていたそうだ。ただし本当の事かどうかは分か  
らない。いずれにせよ、すべて無事にお帰りになったのは、めでたい  
ことである。天皇の母君や將軍の奥方が熊野参詣をなさったのは、最  
近では例がないようだ。

椎野寺主が来た。伏見稲荷大社で、熊野参詣の行列を見物したとい  
う。

※「金属製の飾りが付いていた」：原文は「板輿金二物ムシ恒のごとし」  
とある。

※「烏丸豊光中納言」：原文では「裏松中納言」とある。

九日、晴。園基秀が中納言に任命されたそうだ。今日、そのお祝いをした。

### 羽蟻が飛び立つのは吉か凶か

さて午後一時に釣屋の廊下の柱から羽蟻が飛び立った。これが吉な  
のか凶なのか、よく分からない。

十日、雨が降った。御香宮猿樂は、この激しい雨で明日に延期となった。



後小松上皇は能役者の梅若大夫を寵愛している

楽頭の矢田は、梅若大夫を雇ったそう。この梅若は後小松上皇様のご寵愛なので、梅若はお暇を申し上げて伏見に下ってきたそう。双六の会をした。私・宮家の女性たち・田向三位らで双六を打った。その後、少し酒を飲んだ。

十一日、晴。御香宮猿楽が五番演じられたそう。また双六の会をした。十二日、晴。昨日のように、御香宮猿楽が五番演じられたそう。神様の思召しにより、急に猿楽が今日も行われたという。神様のご威光を恐れるべきであり、またもつと尊ぶべきである。

玄忠が酒樽を一つ持参してきた。それで酒を飲んだ。

### 琵琶法師の妙一勾当

琵琶法師の妙一勾当が来て、平家物語を語った。

十三日、雨が降った。毎月恒例の連歌会、祐譽僧都が当番幹事として準備してくれた。いつものように一献の酒宴などをした。参加者は椎野・田向三位以下、いつもの通りである。幹事の祐譽本人は参加しなかった。

### 芝敷地

綾小路信俊前参議がご恩地である芝敷地について申し入れをしてきた。この敷地には芝俊阿の屋敷を建てるのが予定されている。綾小路はその命令に従えないということなのだろうか。

十四日、晴。豊原郷秋が来た。例の熊野参詣の一行に同行して、お参りしてきたそう。急に思いついて同道したので、旅立ちのご挨拶をすることができなかったという。それで無事に戻ってきましたと言ってきた。ちょうど今、風呂に入っていたので、対面しなかった。

椎野寺主は自分の寺へ帰った。

### 結夏（けつげ）

十五日、晴。夏の修行期間が今日から始まる。いつものようにお経を

読んだ。

十六日、曇。冷泉正永が和歌を百首詠んだと言ってきた。私に良い和歌を選んでほしいとのことだ。思いがけないことを言ってきたものだ。しかし、老後に詠んだ和歌なので、是非選んでほしいとのことだ。正永の和歌を書き付けた巻物の奥に、私の和歌を書き付けておいた。

和歌の浦の 道をも知らで 寄る浪の

かゝる玉をば 如何で拾わむ

君が代に 今も拾わば 和歌の浦の

甲斐ある玉の 光とやみん

明王院へ、熊野先達から無事戻ったことに対して、おめでとうとお祝いした。

### 京都市内で病気が大流行する

聞くところによると、京都市内で病気が大変流行っていて、ひどい状況だそう。大炊御門宗氏内大臣や東坊城元長大内記は、この病気で命を落としたという。かわいそうなことだ。ただし大炊御門内大臣は過労による衰弱死だという噂もある。

室町殿は今日から清水寺にお籠もりになるそう。

十七日、晴。今日は、賀茂祭である。典侍の役を務めるのは中山満親大納言の娘で、近衛の使は白川雅兼神祇伯兼少将だという。中山大納言は、流行病にかかって大変の状況にあるので、出家したそう。

十九日、晴。綾小路信俊前参議が意見を言っている芝敷地については、芝俊阿が敷地から立ち退くという線で、田向三位を通して綾小路と問答をした。綾小路はその線で了承した。しかし芝俊阿としては種々の事情があつて立ち退くことが難しいと歎いている。とてもかわいそうなことだ。

### 真乗寺住職は心気虚労である

二十一日、晴。真乗寺灑首座が来た。真乗寺住職が二月からご病氣だと

いう。住職は精神的に追い込まれており、衰弱していると医師の丹波頼直朝臣が言っているそう。住職はお心を苦しめておられるようだと瀧首座は話していた。とても驚いた。

### 局女別当尼公の引退と老後の生活

二十二日、晴。東御方の局女である別当尼公が、今日、引退するそう。長年仕えてくれた。もとは私の母である故西御方が召し使っていた者であった。母が亡くなってからは、東御方が引き継いで別当尼公を局女として使っていた。

古くからの功勞があり、引退させるのは特にかわいそうである。しかし東御方のやりくりが苦しく別当尼公をこれからも雇用するのは難しい。それで、引退させることになったそう。

別当尼公は伏見莊山村あたりに小さな寺庵を建立して、そこに移り住むという。寿藏主がいろいろと生活面の面倒をみて下さるそう。

二十三日、晴。椎野寺主がやって来た。しばらく宮家に滞在する予定だそう。嵯峨野でもあの流行病がひどく広まっています、椎野の浄金剛院でもその病気に罹った人が居るそう。そのためお寺から逃げ出す人もいる有様だという。

### 東御方の兄弟である日嚴院主・報恩院主の死

故正親町三条公忠内大臣の息子で妙法院の執事を務める日嚴院主が去る十七日に亡くなった。また日嚴院主の兄弟で近年高野山に隠居していた報恩院主も先月十九日に他界しているそう。兄弟が相次いで亡くなり、とてもかわいそうなことだ。それで正親町三条家にお見舞いの使者を送った。この二人は東御方の兄弟なので、東御方もがっかりなさっている。

竹内僧正が亡くなったそう。

### 五条天神流罪の宣下

(今回の病が大流行した責めをうけ、病疫を京都から放逐するため

に、) 五条天神を流罪とする天皇陛下の命令が下された。その命令を伝える天皇の使者が五条天神の本社である祇園社へ送られたそう。(※)。

※この五条天神の流罪については瀬田勝哉「五条天神と祇園社」(同『洛中洛外の群像』、平凡社、一九九四年、初出一九八六年)を参照のこと。  
**流行病の使者が続出する**

二十六日、雨が降った。今出川家の家司である三善興衡朝臣が、今日死去した。今出川家の政所役を務めていた。かわいそうなことだ。これはなかなかどうしようもないことである。

三善の娘で尼となっている者も同じく死んだそう。家中に病人が多く、散々な状況だという。

今出川公行前左大臣も慌てふためいて、どうしていいかわからず、ぼう然としていますと伝えてきた。とてもかわいそうなことだ。

木造俊康大納言・中山満親大納言入道も同じく死去したそう。全国的に広まったこの流行病は、限りなく恐ろしいものだ。

### 貞成の顔が腫れる

二十八日、晴。冷泉正永が来た。私の顔が腫れて、気分も良くない。例の病がこのところ流行している。その折柄、私の症状もこの病なのかと恐れている。宮家の皆をも驚かせてしまった。

二十九日、晴。症状は昨日と同じである。医者的心知客に連絡したところ、良い薬を送ってくれた。

法安寺の住職を呼んで、病氣平癒のために仁王經を読んで祈祷させた。

三十日、晴。症状は少し軽くなったようだ。とりあえず安心した。

さて今出川公富新大納言は、このところ風邪気味だという。医師から家族に風邪が移ると言われたので、公富は他所に出て行ったそう。今出川前左大臣はいろいろと慌ただしくて、大変だという。とても驚

いた。

冷泉正永が帰っていった。聞くところによると、山名・宮田も今日死んだそうだ。(続)